

第五三詔 陸奥の國震災賑恤の詔(貞觀十一年十月十三日)

義農代を異にするも、未だ憂勞を隔てず、堯舜時を殊にするも、猶愛育を均しくす。
豈唯に地は周日に震ひて、姬文是に於て躬を責め、早は殷の年に流れて、湯帝之を以て己を罪するのみならむや。朕、寡昧を以て、飲みて鴻圖に若ひ、徳を修めて以て靈心を奉け、政に莅みて民の望に従ふ。率土の内をして、同じく福を遂生に保ち、編戸の間をして、共に災を非命に銷さしめむことを思ふ。而るに惠化孚む罔く、至

誠感ぜずして、上玄譴を降し、厚載方を虧く。如聞、陸奥の國境は、地震尤も甚しく、或は海水暴に溢れて患を爲し、或は城宇頻りに壓れて殃を致すと。百姓何の辜ありてか、斯の禍毒に罹れる。撫然として媿ぢ懼る。責深く予に在り。今使者を遣はして、就きて恩煦を布かしむ。使、國司と與に、民夷を論ぜず、勤めて自ら臨撫せよ。既に死せる者は盡く收殮を加へ、其の存する者は詳に賑恤を崇くせよ。其の害を被ること太甚しき者は、租、調を輸す勿れ。鰥寡孤獨にして、窮して自ら立つこと能はざる者は、在所に斟量して、厚く支へ濟くべし。務めて矜恤の旨を盡して、朕が親しく覲るが若くせしめよ。(三代實錄「十六」)